日刊 動労千葉

82・3・11

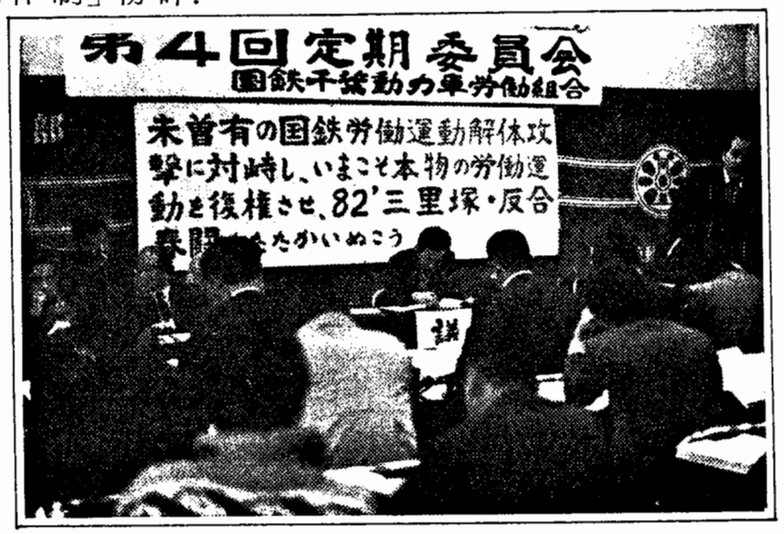
No.989

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五～六・（公衆）〇四七二（22）七二〇七

第4回定期委員会

委員会報告・その1

『反合・三里塚春闘』方針を決定



3.6集会の成功を 3.28三里塚の総決起へ！

―関川委員長あいさつ―

スローガン

未曽有の国鉄労働運動解体攻撃に対峙し、いまこそ本物の労働運動を復権させ、82三里塚・反合春闘をたたかいぬこう！

動労千葉第四回定期委員会は、3月10日動力車会館で開催され、昨年10月の第六回定期大会以降の闘いの経過と、82春闘を「反合・三里塚春闘」として取組む方針を全体で確認しました。

委員会は、西森法対部長の司会のもと、議長に津田沼支部・山下委員を選出して始められました。

冒頭、本部を代表して関川委員長は、「3.6全国労働者集会は、習志野文化ホールを満杯にして多大な成果をかちとった。このことは、いかに多くの労働者が右翼労戦『統一』をはじめとする労働運動の右傾化を憂え、苦闘しているかを表わしている。今こそ原点に帰り右傾化の流れを変えていこう。3.28三里塚現地に大結集し、敵に思い知らせてやろう」と挨拶しました。

活発な質疑応答

続いて「第六回大会以降の経過」と、「協約・協定締結」について、それぞれ吉岡組織部長、布施交渉部長より提案され、質疑応答に入りました。

質問は6名の委員より、「3月1日発令の不当処分に対する闘い方」「検修民託化阻止の闘争体制について」「国鉄労働運動解体攻撃の中での動労千葉の闘い方」「検査、検修、構内運転係の職群問題」について出され、関係各部からの答弁を受けました。

最後に、中野書記長から、「マル生粉砕闘争の勝利以降、労使正常化路線は、結果として幹部うけおい主義の弊害も生み出した。当局は組合員にへいこらし、ストでもそれほど緊張もせず、参加しても大した処分は出ない、等々、これは、一方ではマル生敗北をどう挽回するかという当局の意図的政策という面もあった。しかし、今回の処分発令は、そういう時代を精算し、いよいよ階級闘争本来の姿をあらわにしてきたといえる。きっかけは、民社党・鉄労のタレコミだが、敵の本当の狙いは、動労『本部』の〝働き度を高める運動〟のような、労働者の内部に当局の尖兵をつくり、組合自らが労働者を骨ぬきにし、屈服・転向させていく、というやり方である。労働組合を丸ごと〝当局と一致協力する集団〟に変質させる、即ち産業報国会化するという、こうした階級構造をどう逆転するのか。それは、職場からわきあがる運動＝大衆運動を対当局・対権力との緊張した関係の中でつくっていくことだ。オーソドックスな職場運動を、今の厳しい情勢下であればこそ、なおさら意識的に復権させ、きたえ上げていかねばならない。その原則的な姿勢を強化するという闘いの上に、階級的総体の力関係でいかに敵に打撃を与え、敵の最も弱い環をぶちくだき、戦闘的な闘いを全体に波及させていく階級闘争の全体構造をどう創り上げていくかが重要だ。三里塚と国鉄を二大陣地として闘うという戦略がそれだ。それが『三里塚を闘う労働運動』の全国潮流を大きくつくり出していく闘いであり、81.3闘争の地平の堅持・発展ということも、そういう事だ。動労千葉の『82三里塚・反合春闘』路線に確信をもって、3.28三里塚闘争の大爆発を実現し、突破口としていこう」との総括答弁を受け、全体の圧倒的拍手で確認しました。

社会党県本部が激励の挨拶

来賓として出席された社会党県本部の市川福平氏からは、「国鉄が大変な攻撃を受けているのは、日本労働運動の中で戦闘的な闘いをリードしてきたからだ。今後も一層動労千葉との連帯を強めて、闘っていきたい」との挨拶を受けました。続いて、「82春闘を中心とする取り組みについて」と、「一九八二年度暫定予算(案)」が、それぞれ吉岡組織部長、水野副委員長から提案されました。

［以下次号にて報告］